どうでしょう？

飯島日出美

私どもの園では毎月一回宝仙小学校校長の栗山氏をお迎えして、園児に自然科学指導をしていただくことになっている。十一月の材料は「みかん」であった。

その日。

二年保育年少組の園児五十名が、遊戯室に椅子を車座に並べ、先生のお話を聞きながら、匂をかいだり、皮にさわってみたり、上手に皮をむき種は入っていないかしらとしらべてみたり、大喜びでみかんを食べた。子ども達は、何でも、ほんの少しでも、幼稚園でおやつを食べるのが大好きである。

その後、栗山氏が、水の入った金魚鉢を片手に、みかんを一つ片手に、

「さあ　私がいまこの水の中に、みかんを入れます。みかんをこの水の中に入れると、どうなるでしょう。みかんは浮かぶでしょうか？　沈むでしょうか？」

子どもたちは、しんとして考えている。

「さあ　どうでしょう。」

「いけないの。駄目！」

大きな、子どもの答える声。見ると、私の級のA子である。とたんに私は　はっとし、身のすくむ思いがした。A子がこんなふうな突飛な答え方を堂々とした事から、私の日頃の保育に、このような答え方をさせる一つの癖があった事に思い当ったからである。

その日は、私の他、誰もその事に気付かず、いつものように、先生がたを微笑ませただけで無事に終ってしまったが、私にはその日のことが忘れられない。

私のクラスでも、何か約束ごとを決める時、また、何か事件が持ち上った時、子どもたち自身に考えさせるように指導している。先生が「廊下は走らないようにしましょう。走るとお友だちとぶつかった時にたいへんだし、騒がしいでしょう。」と云うより、子どもたち自身その事に思い当った方が約束の効力が大きいと考えられるからである。

そこで　例えば、

「さっき、S子ちゃんが『ブランコに乗りたいんだけど、男のかたが乗せてくれないの』って鉄棒のところで、しょんぼりしていらしたのよ、そんな時どうすればいいかしら。」

「乗せて！　って云えばいいの。」

「そうね。S子ちゃん乗せて！　って云ったの？」

「乗せてって云ってもね、交ってくれないの。」

「そう。お友だちが乗せてって云っても、乗せてあげないのはどうでしょうね。」

「いけないの」

「どうして？」

「だってね、みんなが乗りたいから。」

「ブランコは、幼稚園のものだから。」
「変りばんこに乗らないといけないの」
「そうね。じゃお友だちが沢山乗りたかったら？」
「並んで、数えて乗るの」
「そうね。二十数えて乗るのね。順番にかわりばんこに乗るのね、だけど、もっと、二十よりもっと乗りたかったらどうすればいいかしら？」
「また並んで乗るの」
「そう。じゃこれから、お友だちが乗せてっていらしたら二十数えて交ってあげましょうね。もっと沢山乗りたくても我慢して、また並んで待っていて、それからもう一度乗るのね。お約束しましょうね。」
また製作をする時なども、よく、こうした指導のし方をすることがある。その製作で、子どもが、間違え易い点を予想しておいて、その間違いがどうすれば起るのか、またどうしてそれが間違いであるかを考えさせるのである。
「こんなふうにしたら、どうでしょう？」
「駄目、いけないの」
「どうして？」
「だってね　おかしいから」
と、子どもたちが、間違えないように予防線を張っておくのである。
こうした指導方法は、別に問題となるような間違った指導方法ではないと思う。が私の場合「ことば」に問題があったのである。「ことば」に問題となるような一つの癖があったのである。
第一に、いつも「どうでしょう。」と問いかけたこと、しかも大抵の場合、悪い例、間違った例を取り上げ「どうでしょう」と問いかけたこと、これは、どんなに効果があったとしても避けなければならないことであった。
第二に、その問に対し、子どもたちが「だめ」「いけないの」と答えるのを「どうして？」と問うことによって、其の場其の場では本来の目的を達することが出来ていたにしても「どうでしょう？」に対して、ほとんど決って「いけないの」「だめ」と答えるのを放置していたこと、他の答え方をさせるよう考慮をなさなかったことは指導上の大きな怠慢であったわけである。
「どうでしょう？」
「いけないの」　「だめ」
この二つの問答がいつの間にか子どもたちの頭の中に習慣づけられてしまっていたのではないだろうか。たしかに、一種の反射反応のような型になってしまっていたのに違いない。それでは何にもならない。
「どうでしょう？」　「いけないの」
栗山氏の時間に、この問答を、しかも見当はずれの問答を聞かされ、深く反省させられた。それ以来私はこんな風に考える。
一人ひとりの先生には各々小さな癖、その癖自体は、とりたてて問題にするほどのものでもない、ちょっとした指導方法の癖が幾つかあるのではないかしら　と。そしてその癖が先生自身予想もしていないような結果を、どこかで生んでいるのではないかしら、と。
だからと云って、先生　一人ひとりが、癖のない完全な人間、教育者でなければならないとも、神経質に注意していなければならないとも考えないが、常に、自分自身の指導方法と、それの生む　さまざまな結果を注意深くみつめていなければならないと、深く考える。
（井草幼稚園）